

立てたれど、世人は今も大音家中と呼べり。延寶金澤圖に、前口四十間四尺五寸、東側七十四間三尺五寸、西側百八間三尺五寸とあり。大音氏の下邸たりし頃は、地内に觀音堂ありて、堂内に銅像を安置し、毎歲七月十日は四萬六千日とて、堀川太岩寺の和尚來て施餓鬼を執行せしかど、廢藩の後かの堂宇を毀ちたり。右銅像の御厨子に左の如く記載あり。

奉拜請安座十一面大悲尊

尊像安阿彌之作

伏冀。天下泰平。國土豐饒。君臣武運長久。家門無病息災。衆怨退散。子孫繁榮。福壽綿延。火盜双消。諸緣吉利者也。

享保十八癸丑林鐘十七日

大音主馬敬白

家傳に云ふ。此の佛像は靈驗いちじろしく、そのかみ尻地なる裏門坂より盗人入つて、此の銅像を盗み往かんとせしかど、身縛りたるが如くにて行く事叶はず、遂に尻地のかげに捨て行きたりと。是より他方の參拜を禁ぜりと云ひ傳へたりとぞ。

○安藤町

俗にアンドン町と呼べり。此の町は、大音下邸の隣地にて、石引町の小路なり。延寶金澤圖に、明興足輕組地の由記載す。三州志變餘考に云ふ。今金澤小立野安藤町は、安藤長左衛門第宅の舊地と云ふと。平次接するに、此の地は、從來鐵炮組の輕卒の組地なり。安藤氏は即ち鐵炮組の足輕頭なり。されば組子の者と共に此の地に居住せしか。蓋し新堅町の後、町杉浦町も輕卒の組地にて、延寶の金澤圖に、杉浦仁右衛門預足輕と記載ありて、杉浦氏の組足輕共の組地なるにより、杉浦町と于今呼べり。されば安藤町も安藤氏の組足輕共の組地なる故に、安藤町とは呼べるなるべし。此の地などに、いにしへ藩士の居第あるべきよしなし。安藤氏の第跡といふは過聞なるべく、おもふに昔は居第に依つて町名となすもの皆俗名を以て呼べり。所謂彦三町、宗半町、宗叔町或は出羽町・信濃町の類是也。杉浦町の例にて見れば、組地は其の頭の苗字を以て呼びたりけん。

○安藤長左衛門傳略

安藤氏の子孫金澤になきゆゑ、其の履歷詳かならず。三壺

記等を考ふるに、中納言利常卿に奉仕し、二千石を賜はり、鐵炮足輕大將を命ぜられ、慶長十九年大坂冬陣に出軍す。元和二年の土帳に、鐵炮頭二千石安藤長左衛門本多組とあり。三州志變餘考に云ふ。安藤長左衛門、世本に二千石、一本には千五百石とす。萬治初めの土籍に、小姓衆の内に即ち千五百石安藤長左衛門とあり。今江戸本丸御留守居番二百俵安藤長左衛門祖なり。元祖長左衛門は、金澤一向宗専光寺の檀那にて、即ち同寺過去帳にあり。長左衛門の子長兵衛の時浪人せるか、同寺天和年中の過去帳長兵衛肩書に、浪人とあり。其の後江戸へ行き、幕府の旗本と成りたりと聞ゆ。長左衛門病死は、寛文五年十一月十二日なり。寛政十二年江戸安藤氏より聞番まで問合ありて、始めて當時長左衛門の子孫旗本にある事知られたり。又寛永十六年小松へ引越す諸士の中に、二百石安藤助左衛門と云ふあり。長左衛門と同族なるか。今藩士中に此の苗字なしといへり。

○睡虎山岩倉寺

此の寺は、石引町にありて、眞言宗の佛刹なり。貞享二年

の由來書に云ふ。開祖看源法印は、野尻大納言の末葉にて、參内勅免の法印繪旨傳來の處、享保十六年の焼亡に焼失す。看源生國は出雲國仁田郡、岩倉寺の住職中、留學執行として高野山に住山す。出雲國岩倉寺の本尊千手觀音、加賀國有縁の由頻に夢想あり。依つて看源本尊を荷負し、高野山より金澤波着寺の開祖と同道し、慶長十八年に金澤へ罷越し、篠原出羽町山田如見と云ふ人の屋敷を買ひ請け、本多元祖安房守等の助力に依つて寺建立、微妙公御目見も被仰付、正五・九月の御祈禱も被命たり。然るに寛永七年に出羽町の寺地召上げられ、替地として石引町の今の寺地二百五十五歩拜領被仰付、此の地へ移轉建立、享保九年十一月改めて御祈禱所に命ぜられ、祈禱料として米拾石御寄附、御目見寺に被仰付と云々。

○岩倉寺驗者傳話

享保年中所筆記の咄隨筆に云ふ。金澤中町に何屋彦丞とやらんいへる者、元祿四年の頃煩ひける。如何なる病氣ともなく、只瘦せて骨と皮ばかりに成りゆき、食事も常の如く、別に病氣の品は知れざりき。如何なる靈の見入りし歟、